

佐賀氏談記

大谷村川竹湯坂海へ事

大谷村川西家各事佐賀の事なり代々ある
町人なり子孫今所奉る役御い出西家外南坂西家
洋坂を蒙る事、南園前の大守中村佐賀守
忠一蒙る長丁に年々卒ふ川へ嗣る事更へ故跡
新流を、その後二年多く国を更へして湯
順と名に湯城代奉る武家より来事して

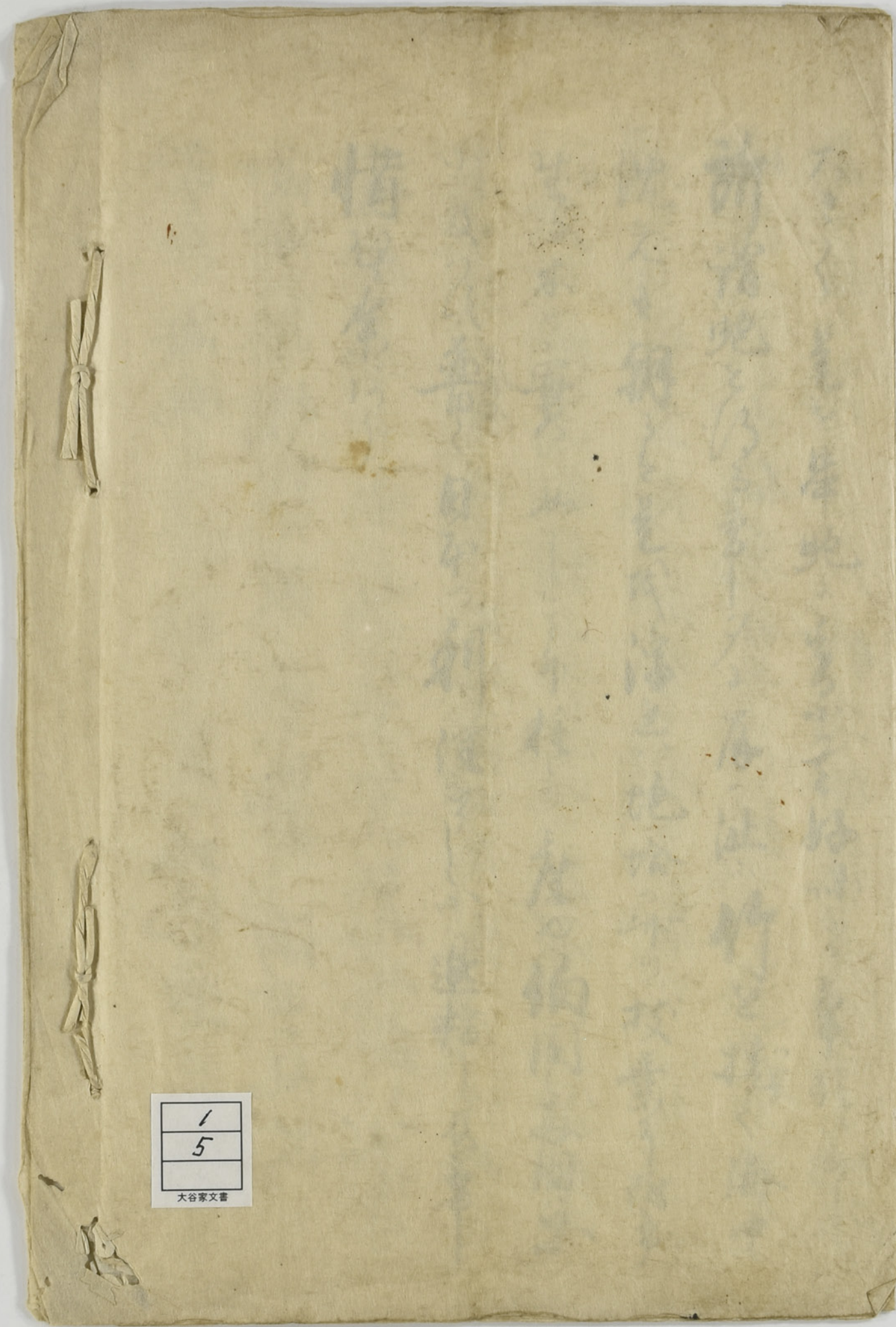
尚城は名一物ありて保護するに二年所経るに
 めるに其妻あるに時ふ妻竹島海に身をま
 けりて母を松平新太郎は政々尚固と官願し
 て入部有るに倭人又是城に下地を政々氏
 領するに是城をこれより竹島に押渡り海脱
 するに其後毎年海に島に船に元禄の中
 年海海より其の島に群衆して海脱とす
 其の島に其の島に其の島に其の島に其の島に

及んとはよき事なり。而して安んずるが帰航を又得て
の幸波海より唐人數多波り、萬分其幸なり。
海賊とばし、依りて謀どかり、多人其捕り。
是連より帰航し、同年に舟寄來の時刻、弟子
者居り、離所を去り、宅に入る人を入置甚う
言ふ。及ぶ清源公綱圓は太谷村川若人とも取らん
芳流が細江島尾買忠誓永女（佐）小僧、彼老を
石連より湯吐味の上東遊之云々、一か朝報國するも

使と云く彼島の事種々新記にありゆゑ遠彼島
朝鮮附せられ太古村川渡海に依止せられ
是を退轉しく今に至り島渡りあり竹嶋とて
日本と離る事幽室に朝鮮に祖述に渡島とて
四月の久え臨波國に渡り強き南境とて久く觀城解き
押渡り島に渡り乾か南てり程百里なり朝鮮に
祖述に彼國の漆金山浦にあり大黒夜光の
彼浦に燈火の光り候ふや夏のるにこの島

ありて海膽とて秋に到り歳に北風来りて常航と
渡海のもの行路に限り字を越え海にの風波と
凌るるに島の形も三つあるれ山嶽とて境内
廣く人民古く大作家木成り盛なり法馬會
歟多し矣其地貝類多し強し元海に産るは
海にや其地の海者其果ある事ありと云ふ
世に海に生る猫鹿多しと云ふ今に海に
尾の短く曲れし人の竹嶋猫鹿と云ふ事ありと云ふ

大きく是を半砲よりふそ好味ある事類いふ
所謂砲よりる事一ツ又居の止^三行と提^つく海中
沈没を銅より是成深き地蛤の作の枝葉より附事
生る木の實の如し一ツ中種の産の伯國と西國と
小及び^北南^南の日本の利便ありふ逃轉り及事
惜^しと奈^り



1
5
大谷家文書

【大谷家文書】 1 - 5

